

「オラン・アスリから見た Wawasan 2020 の時代」

信田敏宏

オラン・アスリは、マレー半島に住んでいる先住民です。現在は人口約 20 万人です。1992 年に初めてマレーシアに行きまして、1996 年から 1998 年の約 2 年間、ヌグリ・スンビラン州のオラン・アスリの村でフィールドワークを行ないました。その後は、継続的に調査をしています。

1990 年代の長期フィールドワークの頃、Wawasan 2020 の話題はマスメディアでよく見聞きしました。2020 年に先進国入りを果たすという目標は、目の前で経験していたオラン・アスリの村の生活実態を考えると、とても達成できるとは思いませんでした。2020 年という遠い未来におよそ達成できるとは思えない目標を設定した非現実的な政策であると考えていました。とはいえ、実際、2020 年になった今、この間のオラン・アスリの状況を振り返ってみることは、多少なりとも意義ある試みと思います。

初めて調査地を訪ねたのは、27 歳の時です。当初は子供たちから「お兄さん」と言われていたのですが、その後「おじさん」になりまして、最近では「おじいさん」と呼ばれるようになりました。最初に出会った 1 歳くらいの子供たちの多くが、今では結婚して子供もいるというように、時の流れを感じさせられます。

1990 年代後半、写真 1 のように村の家は他のオラン・アスリの村でも見られる政府提供の家が多かったです。貧困状態にあるオラン・アスリに対して、政府は家を建てるという支援を行なっていました。生業は主にゴム採取で、これも政府の援助によって行なわれていました。ドリアンも育てていましたが、これは自力で行なっていました。村に向かう道路は、当時舗装されてはいませんでしたが、今は舗装されています。道路の舗装は、選



(写真 1)



(写真 2)

挙があるたびに行なわれていました。選挙の票集めのため、UMNOのマレー人の政治家が道路の舗装を村びとに約束していたのです。写真2のように、村の会館（アダット会館）には当時の首相マハティールの写真が飾ってありました。

ここからは、村の変化について考えてみます。ゴム採取やドリアン収穫については、最初に訪ねた時から、現在まで作業内容は大きくは変わっていません。結婚式や婚約式など、婚姻儀礼についても2005年ぐらいまでは、大きな変化はありませんでした。村の中にあるゴムの仲買店は建物自体は大きくなったのですが、そこでの作業内容もあまり変わっていません。



(写真3)

これは、2015年の写真です（写真3）。背景に写っているのは、小学校の先生をしている女性の家族の家ですが、先ほどの家の写真（写真1）とはだいぶ違い、大きくて立派な家です。このように、今では、政府に頼ることなく、自前でコンクリート作りの家を建てるが増えています。それだけ、経済的に自立している世帯が多くなっているのです。ところで、写真のこの

おじさんは森で採れたプタイ豆を町まで持っていかうとしています。1990年代には壊れかけの自転車で森に出かけて、木によじ登ってプタイを採っていました。写真を撮影した時には「おじさん、相変わらずだなあ」と思っていたのですが、よく見てみると靴と靴下を履いていました。以前は、おじさんはサンダル履きで裸足でしたし、靴も靴下も持ってもいませんでした。しかもこの時はギア付きの自転車に乗っていました。これはおじさんにとっては大きな変化です。おじさんは、2000年代にキリスト教に改宗したので、宣教師に言われて靴や靴下を履くようになったのかもしれないし、支援があって生活も安定したのかもしれない。

1990年代、村には雑貨店があったのですが、2017年に訪問した際には、政府の援助を受けて新しく建て替わっていました（写真4）。この時には、舗装されていなかった村の中の道が舗装されていました。屋根が綺麗に葺き変わっている家もありました。その家は村では裕福な家で自力で建てた家屋なのですが、1997年当時と比較すると、さらにグレードアップしています。村で最初に大学を卒業した娘が学校の先生になり、家をリフォームしたのです。



(写真4)



(写真5)

この時、ちょうど結婚式が行なわれていたので参加したのですが、イスラームに改宗した村の人たちが結婚式に参加していたことがこれまでと違って非常に大きな変化でした（写真5）。以前はイスラーム改宗者と村の人たちは対立していました、イスラーム改宗者の人たちが結婚式に出るようなことはなかったので、普通に参加している姿に驚かされました。結婚式の準備の様子は、以前と変わりがありませんでした。

男性たちが肉を切っているのも、女性たちが料理の準備をしているのも以前と同じでした（写真6、写真7）。会館の壁には当時のナジブ首相の写真が飾ってありました。ただ、この結婚式はオラン・アスリ同士の結婚式ではなく、サバ州のカダザン人の男性と村の女性の結婚式でしたので、いつもの結婚式とは少し様子は違いました。新郎側の参加者は少なく、新郎の兄弟姉妹だけが結婚式に参加していました。飾り付けが以前と違い、オラン・アスリ風になっているのが目を引きました。これらの飾りはパンダナスの葉やバナナの葉で作られていました。



(写真6)



(写真7)

かつては結婚式の際、新郎新婦はマレー人の店でマレー風の服を借りてくるのが一般的でした。しかし、近年は、樹皮で作ったオラン・アスリ風の服を着る人たちもいます（写真8）。これは大きな変化でした。また、マレー人の招待客も来ていて、（ムスリムでも大丈夫な）マレー料理のケータリングを頼むなど、彼らでも食べられる料理が出ていました。以前は、村



(写真8)

の人が作る（ムスリムは食べられない）料理しか出されなかったので、マレー人の招待客や村のイスラーム改宗者は、結婚式では皆と一緒に食事ができなかったのです。

調査村の20年を簡単に振り返ってみました。写真では見えない変化の一つに、世代交代ということが言えます。村にはアダットリーダーといって5人のリーダーがいるのですが、1人を除いて、皆亡くなってしましまして、新しいリーダーに交代しています。また、写真からも垣間見えるのですが、経済的には豊かになってきています。かつて村には車が3台くらいしかなかったのですが、今は各世帯1台、あるいは2台持っている世帯もあります。家も、写真で示しましたように、政府の援助に頼ることなく自分たちで立派な家を建てている家族が増えています。

経済的豊かさの背景には、主要な生業であるゴムの値段が上がっていて収入が増えているということが挙げられます。また、アブラヤシ栽培を始める人も出てきました。農薬を使わない野菜の評判が良く、それらが売れるようになってきたので、商品作物の栽培を始める人も出てきたということもあります。

ホワイトカラーの仕事に就く人も増えています。かつては大学に進学する人は村で1人でしたが、近年は大学に進学する若者が多くなっています。マレーシアで大学と言えはいくつもの国立大だけだったのですが、近年は私立のカレッジも出てきているので、プミプトラ枠を活用したりして、村でも大学進学者が増えています。大学を卒業した村の若者たちは、プミプトラとしての優遇を受けて公務員や学校の先生になったりしています。このような人たちは以前より増えています。こうしたことから収入が安定して、経済的に豊かになっていると言えます。

もう1つの変化は、他の民族との交流が以前よりも活発化しているということです。これはFacebookなどのSNSを見ていても感じますが、村に訪問した際にも実感しました。他の民族との交流に抵抗感が少なくなったというか、壁が低くなったという印象を持ちました。特に村の外でホワイトカラーの仕事をしている人たちにそうした意識があるようです。

宗教についてです。イスラームに改宗することに非常に抵抗のあった村でしたので、キリスト教徒になる人が一時期増えましたが、最近ではオラン・アスリのイスラーム改宗者やマレー人との結婚に際して改宗する人も増えています。以前は、結婚によるイスラーム改宗が原因で家族の間に軋轢が起こることはよく見られたのですが、最近ではそうしたことは少なくなっています。イスラーム改宗者が多くなってきて、改宗を受容せざるをえなくなってきたということもあり、家族や親族間での争いが表面的には少なくなってきたように見えます。

通婚についてですが、華人とか、マレー人とか、写真にあるようにサバ州のカダザン人など、いろいろな民族との通婚が増えてきています。

また、これは少し強調しておきたいのですが、生活習慣病の増加が顕著です。肥満の人が多いです。癌や心臓発作で亡くなる人の話をよく聞きますし、脳梗塞を起こす人もいます。特に糖尿病になる人が増えています。そうした周囲の話を聞くからでしょうか、一方では、健康志向も高まっています。無農薬の野菜を食べたいといった意識が出てきている

のは、興味深いです。

以上、調査村の20年を見てきましたが、オラン・アスリ全体の傾向は必ずしもこの村と一致しているわけではありません。オラン・アスリ全体としては、彼らが住んでいる森林地域で、森林伐採やアブラヤシのプランテーション開発が多く行なわれるようになり、オラン・アスリが開発の犠牲者になるといった事例が増えています。特に開発のフロンティアである边境、クランタン州やペラ州など、まだ開発が及んでいなかった地域にまで開発が及ぶようになって、様々な問題が発生しています。オラン・アスリは基本的に土地の所有権を認められていません。しかし彼らは慣習的な土地の所有権や居住権を主張して、裁判闘争を行なっています。最初の裁判闘争として、スランゴール州のブキット・タンポイ村の有志が起こした裁判が知られています。クアラ・ルンプール国際空港の近くにある村なのですが、この裁判は彼らに有利に結審したので、その後、開発や土地をめぐる裁判が次々に行なわれるようになっていきます。

オラン・アスリの権利をめぐるNGO活動や先住民運動も活発化しています。2008年にはクアラ・ルンプールのセントラルマーケットの近くで大きなデモが行なわれました。それは、サバ州、サラワク州の先住民の人たちと連携して行なわれたものでした。

余談ですが、オラン・アスリ行政を担うオラン・アスリ局は、最近オラン・アスリ開発局という名称に変わりました。2018年の政権交代を機にオラン・アスリ出身者がオラン・アスリ開発局長官に初めて就任しました（現在は、任期終了で退官）。ジュリ・エド長官は、セマイというオラン・アスリの1民族出身の人類学者で、マラヤ大学で教鞭を取っていた人で、私が調査している村でも調査をしています。1990年代後半に私が調査した後に、彼は私と同じように村で養子になって調査を始めたそうです。

今後についてですが、まず心配なのが、新型コロナウイルスがオラン・アスリの人たちにどのような影響をもたらしているのかということです。それを知るためには、マレーシアに調査に出かけなければいけないのですが、調査地にいつ行けるのかが不透明な状況です。（2021年8月現在、ロックダウンの中、村では政府から食料の提供を受けたり、ワクチンを接種したりしています。一方で、近隣のオラン・アスリの村では感染者が出始めているようです。）

マレーシアの政権についてですが、ラウンドテーブルの第一部で話題になりましたが、今後どうなっていくのかは分かりです。政権交代で少しオラン・アスリに有利な判決が出るようになっていますが、これがいつまで続くのかということも注視しなければならないと思っています。

調査村の状況としては、世代交代が進み、生業もさらに変化していくのではないかと考えています。特に狩猟・採集といった生業をする人たちがだんだんいなくなっていくのではないかと推測しています。今後、自分たちはオラン・アスリであるというような民族のアイデンティティ意識を彼らは具体的にどこに求めていくのかは大変気になっているところ です。

今回、Wawasan 2020をテーマにオラン・アスリ社会の変化を振り返ってきましたが、

こうした試みは私にとって有意義なものでした。特に、村の変化やオラン・アスリ社会全体の変化が何によってもたらされたのかを知るための手がかりを見つけたように思います。当初オラン・アスリの世界とは遠い話と思われた Wawasan 2020 ですが、よくよく考えてみれば、その国家的な政策ビジョンはマレーシア国民の一員であるオラン・アスリの社会にも様々な影響を与えてきたことは確かです。具体的にどういった政策や理念がオラン・アスリ社会に変化や影響をもたらしたのかなど、Wawasan 2020 とオラン・アスリ社会との相関関係については、今後の課題とさせていただきたいと思います。

(のぶた・としひろ 国立民族学博物館)